「忠総院豊後往来紀行」解題と翻刻

渡辺憲司

「忠総院豊後往来紀行」は、江戸時代の初め好学の大名として知られた石川忠総（天正十年～慶安三年、一五八二～一六五〇）が、任地豊後日田へ行った折の紀行文である。

知り得た諸本は、九州大学付属図書館蔵（音無文庫）、慶応大学付属図書館蔵（内藤風虎旧蔵本）、足利学校遺跡図書館蔵（足利郡利保村鍋造なる者より足利学校へ寄贈）、東京国立博物館蔵（徳川達道旧蔵本）の四本である。いずれも写本で、語句表現の異同、一部脱落部分もあるが、内容はほとんど同じものである。外題は、九大本に、「源忠総朝臣豊後紀行」とあり、足利本に「豊後日田紀行」、東博本に「石門公御道の記」とある。慶大本には外題は存しない。内題は、九大本、慶大本ともに、「忠総院豊後往来紀行」とあり、本稿の題名はこれによった。東博本には「忠総公御道の記」とあるが、足利本には内題は存しない。尚、本稿の翻刻にとりあげた九大本の書誌的説明は後に別記した。

従来本書に言及したものでは、福井久蔵氏の「諸大名の学術と文芸の研究」（昭和十二年五月　厚生閣）、田中晃氏の「石川主殿忠総・日田紀行」（昭和五十六年「日田文化・24号」）がある。

成立について両氏は、石川忠総が日田へ封ぜられた時のものとして、年次を明確に記されてはいない。しかし、本文の始めの方に

さても過にし秋のころ、文王めいとくあり、天また武王に命せることくにて、前の大樹、今の柳営に御つかさをゆつらしめ給ひて、東より御供にのぼりし中にも、西の国にも、知所あるをは、宮古よりかへし給ふ

とある。「前の大樹」とは徳川秀忠、「今の柳営」とは徳川家光の事であり、これは元和九年七月廿七日に、家光が内大臣に任ぜられたことを、「御つかさをゆつらしめ給ひて」と記したのである。また、帰路京都へ立ち寄った際の記述に

都には東のゑひすをたいらくるの、君の御むすめの御はらに先の月のすへに、女宮生れさせ給ふと聞て、三日のあけかた京にいたりて

とある。「女宮生れさせ給」とは、後の明正天皇（父、後水尾天皇、母、秀忠の娘、東福門院和子）が、元和九年十一月十九日に誕生されたことを示すものである。さらに、「中院通村日記」の元和

九年十二月六日の条に「一昨日送石主殿頭渡草津帰候」とあり、石主殿は石川主殿頭忠総を指し、十二月四日は、紀行文中より京より草津へ向った部分に相当する。

この紀行文は元和九年八月廿七日に京を出発し、淀に着き、廿八日、石清水八幡、そして須磨、淡路島、唐琴の浦、響灘、虫明の瀬戸、大島、鞆の浦、忠海、厳島、大畠の瀬戸、九月十一日、上の関、姫島、豊後高田に至って船よりあがり、宇佐宮、羅漢寺、東紀伊を過ぎ、十三日に目的地日田に到着する。それより三ケ月程九州の地にあって、太宰府、高良宮などに遊び、十一月十五日には、帰路赤間ケ関に立ち寄り、十七日には柳ケ浦、十九日陶灘、西宮を通り、十二月一日には伏見に到着する。三日、京に入り、日野岡、逢坂、草津、土山、佐夜中山、宇津山、三保、富士川を経て十二月十五日に江戸に着き、十六日将軍へ拝賀する所でこの紀行文は終っている。約四ケ月程の旅日記風に書かれたもので、その間、歌枕の地などで、五十八首の歌を折々に詠んでいる。

作者、石川忠総については、従来、「寛政重修諸家譜」及び「藩翰譜」による説明がなされてきたが、彼の伝記について書かれたもので、もっとも詳しいのは、伊勢亀山にある石川家の菩提寺本久寺所蔵の「日観大録」である。日観は石川忠総の法名で、忠総没後二百回忌法要に際して、近藤織部並びに石川守善なる石川家の家臣が献納したものである。軸装（縦二米五十糎・横一米十五糎、約四千七百字）で、当時の藩主石川総和が「修徳立義」、石川総定が「日観公実録」と上部に横書きしている。その全体は未紹介の如くであるが、本久寺住職龍溪隠史が、「本久寺志略」（騰写私家版）において原漢文を書き下して、その一部を「増訂　日観大録」と題して紹介されている。石川忠総の伝記研究において価値あるものと思われるので、機会を改めて紹介したいと考えている。今は、「日観大録」を参照しながら忠総の略譜を記しておく。

○天正十（一五八二）年、
大久保忠隣の三男として、遠江二俣城に生れる。母は石川家成の女。▽「日観大録」には、小田原に生れるとあるが、「増訂日観大録」では遠江二俣城に生れたとあり、大久保家へ照会した旨を注記している。

○慶長元（一五九六）年、十五歳。
元服、秀忠の一字を賜わり忠総と称す。後に総輔、敦高と改め、更に後、忠総と称した。幼名阿亀、千勝と称し宗十郎と改める。

○慶長三（一五九八）年、十七歳。
家康、命じて近侍とする。

○慶長五（一六〇〇）年、十九歳。
堀尾可晴の女と結婚。石川家成の養子となる。

○慶長八（一六〇三）年、二十二歳。
従四位下に叙せられ、主殿頭に任ぜられ、五千石を賜う。

○慶長十四（一六〇九）年、二十八歳。
養父石川家成卒し、大垣五万石を襲封。

○慶長十九（一六一四）年、三十二歳。
大久保忠隣改易、近江国栗太郡上笠村に五千石で配流され、井伊直勝に預けられる。大久保、石川両家並びにその縁者、一門連座し、忠総も駿府に閉居の身となる。十月、大坂冬の陣に出兵を許

される。

○元和二（一六一六）年、三十五歳。

一万石加増され、大垣より豊後日田へ移封され六万石となる。

▽豊後国日田、玖珠、速水、大分、直入の一部で四万石と伊予国周敷、新居の両郡を併せて二万石。

○寛永五（一六二八）年、四十七歳。

大久保忠隣近江石ケ崎に没する。

○寛永十（一六三三）年、五十二歳。

一万石加増され、日田より下総佐倉へ移封され七万石となる。

○寛永十一（一六三四）年、五十三歳。

従四位下に叙せられ、佐倉より近江膳所に移封される。

○慶安三（一六五〇）年、六十九歳。

十二月二十四日没、日観忠総院と号す。京都の本禅寺に葬られる。

石川忠総は茶道及び和歌に関心のあった大名でもあった。「茶道辞典」（東京堂　昭和三十一年刊）等によれば、遠州七窯の一つである膳所焼の創始者であると記されている。この点については、忠総が膳所に入封した寛永十一年以前、寛永四年、五年、十一年の茶会（国会図書館蔵「遠州茶之留」及び同館所蔵「遠州口切帳」参照）において既に膳所焼が使用されており、創始したという通説は当らないが、膳所入封後、膳所焼の強力な庇護者となり茶道に関心を持った大名としての逸話と理解することが出来る。実父大久保忠隣もまた古田織部の弟子として知られている。忠総は遠州の寛永十九年四月廿二日朝（「遠州茶之留」）の茶会に、大久保右京（教隆、実弟）、石川播磨守（総長二男）、大久保惣三郎（教勝、教隆の子）、石川阿波守（貞当、三男）等と一座し、また正保三年卯月廿八日朝（「遠州口切帳」）の茶会にも、小野了玄、本阿弥佐兵衛なる人物等と一座していることが知れる点より、彼は小堀遠州より茶の手ほどきを受けていたと思われる。

和歌への関心については、「日観大録」中にも、「後水尾天皇、中院通村卿に勅し公の国歌を召す、題惜落花を以てす。公、辞すれとも可されず、恭んで五首を詠して献ず、天皇御感、賞するに屏風に雙を以てす、又日光廟を拝し数首を詠して之を献す」とあり、また、「正木葛」（清水宗川等編、延宝二年成）にも二首入収している。彼は中院通村より元和元年一月十五日、古今三箇の秘事を伝授されていることが、「中院通村日記」の記事より知ることが出来る。先に成立に関して前述した部分で、日田よりの帰路通村より出迎えを受けていることにふれたが、同日記の、元和元年二月四日の条には、通村が忠総を同道して天海を訪れ、大久保忠隣の罪の軽減を訴える記事などがあり、また、しばしば、忠総が上洛の折に旅宿を訪れた記事が散見する。歌の指導を通村に受け、その交遊関係も浅からぬものであったのである。

石川忠総関連の著述としては、「石川忠総留書」（慶応大学図書館蔵）がある。慶応本は、正徳五年の写本であるが、奥書によれば石川忠総が著したものであるとされている。その内容は天正五年より文禄三年迄の徳川家草創期の事柄を戦記を中心に記したものである。また「石川忠総家臣大坂陣覚書」が『続々群書類従』に所収さ

れているが、これによっても大坂冬、夏の陣における忠総の活躍の様を知ることが出来る。「日観大録」にも軍功の逸話が多く記されているが、武将としても第一級の人物であったのである。

「忠総院豊後往来紀行」は、以上の如き歌人としてまた茶人としての教養を裏づけに書かれたものである。本稿は作品の紹介を旨としたものであるが、この紀行文の着目すべき点について若干述べておく。前記した福井久蔵氏は、「大名の紀行としては古きものならむ」と、また、田中晃氏は、「紀行文の特徴である歌枕の旅日記で、これによって彼が日本の古典に通じ、和歌が上手であったことがわかる。（中略）貴族的教養を身につけたと思われる」と記しておられる。大名の紀行文としての歴史的な古さ、また作者の貴族的教養のあふれた文体も着目すべき重要な点ではある。

しかし、注目されるのは、両氏の指摘された点のみではない。本書には、後世の大名の紀行文が古典的教養を披瀝する大名の余技として多く書かれているそれらと異った側面を見い出し得ると考えられるからである。石川忠総が日田に封ぜられたのは、実父大久保忠隣改易事件に連座して、駿府に幽閉されていたのが、大坂の役の戦功によって赦されたためである。この紀行文には、この改易事件が色濃く影を落している。旅出つ忠総の胸に去来していたのは、十年前の改易事件であった。彼は冒頭部分で、「本よりむまれたるところにもあらて、十とせあまりかほと、思の外のこと出きて豊国の日田といふところに所かへして…」と記している。旅中、忠海では、沖に白い鷗の遊ぶを見て、「世のきうてんをまぬかれす」と記し、「波かくる世をはうらみし荒磯に　あそふかもめのこゝろなりせは」と記し、また厳島では、この世を憂き世と感じ、「さきのよのむくひとせめておもはすは　うきをなくさむかたやなからん」と詠じている。この忠総の思いは、遠路を行く旅情のみではなく、改易事件により世の転変を感じざるを得なかった彼の私憤とも言い得る感慨であったと思われる。また旅の帰路、北近江に今も隠れの身となっている実父大久保忠隣の事を思い、「おやのおもひのほかのつみにあたりて、北あふみにあるをもいくとせゆきかふとても　たよりにつけたるふみさへかなはて、こなたの空をみやるはかり也」と述べている。伝統的な紀行文体を借りて彼が披瀝せんとしたのは、古典的教養、趣味をひけらかすが如き自己満足ではなく、彼の胸の底にわだかまるうつうつとした思いであったのである。

大久保忠隣事件の発端は改易の前年、馬場八左衛門が家康に忠隣謀反の企てがあると訴えたことによる。しかし、この表面的な理由の他に、大久保忠隣と本多正信という幕閣内における権力闘争のあったことが指摘されている。改易事件は、本多家側の勝利に終った。だがその本多家も、元和二年には本多正信が死に、元和八年には本多正純が所謂宇都宮釣天井事件によって改易されている。この紀行文の背後には、筆者が時の流れを意識し、「世のきうてんをまぬかれす」「さきのよのむくひとせめておもはすは」いられぬ心情があったのである。「十とせあまりかほと」前の事件と時の流れが、この紀行文成立の基盤になっているのである。

大久保、本多両家の抗争をふまえて、自らの思いを吐露した人物に大久保忠教（彦左衛門）がいる。忠教は、忠隣の叔父にあたる人物である。忠教は「三河物語」において、忠隣の改易について、「子

の主殿をはじめ、我等こそ知らね」と記し、後年の本多家改易については「因果之報かと、又世間にて犬打童迄申なり」と記している。主殿とは石川忠総のことである。「忠総院豊後往来紀行」と「三河物語」では、全く相異なるジャンルに属す。文体、調子、文芸性等異なる点のみが際立つであろう。しかし、作者二人の胸にある思いはおそらく同じものであったのである。

問題とすべき点は多く残されているが、作品論としての展開は別稿に譲りたいと考えている。

次に底本とした九州大学付属図書館蔵本の書誌的説明と、翻字に際しての凡例をあげておく。

〔書誌〕

所蔵者　九州大学付属図書館　整理番号　549タ2　後補帙入り

外題　源忠総朝臣豊後往来紀行

題簽　原題簽　左肩　15糎×3糎　青雲模様

内題　忠総院豊後往来紀行

写本　一冊　奥書等無し

蔵書印　「音無文庫」（3.5×1.3　松葉色）他

表紙　縹色　24糎×15.3糎　匡郭無し　字高19糎

紙数　25丁（うち遊紙4丁　墨付21丁）

本文　8行

〔凡例〕

一仮名は現行の字体に統一し、漢字の旧字体等はおおむね新字体、通行の字体に改めた

一底本には、句読点、及び行がえ等はないが、読解の便に句読点、及び行がえを行なった。また各丁の終りを（ ）内に記した。

一足利本との相違で本文の内容にかかわるものを注記し、後にまとめた。用字の違い等は注記しなかった。尚、八丁裏の本文の注記はそのまま残した。

忠総院豊後往来紀行

明々たる上天、下土を照臨す。われゆきてにしのうみ、やへのしほちをわけ、ふかき野山にまよひしことゝも、こゝろの水のこほりもとけゆくころなれは、まつ下といへる検校となきみわらひみ、身のうれへをたかひにいひ出けるに、さても過にし秋のころ、文王めいとくあり、天また武王に命せることく（一オ）にて、前の大樹、今の柳営に御つかさをゆつらしめ給ひて、東より御供にのほりし中にも、西の国にも、知所あるをは、宮古よりかへし給ふ。

本よりむまれたるところにもあらて、十とせあまりかほと、思の外のこと出きて、豊国の日田といふところに所かへして、家童子なとつかはしけるに、おちほひろふなとをも、田つら見かてらに参るへきよし（一ウ）おふせことにて、八月のすゑに、よこをりふせるやはたのふもとまてかとてして、それ（注1）よりわふといひけん浦までは、みやこの人もをくりしといへは　舟ちのしわさのうたやある。

その折ふしは、はいかいうたなと、こゝろにうつり、こと葉にもいひ出けんも、としのかさなるしるしにや、夜半のむしろにおもふ事、あかつきのまくらにはとまらすとかたりけれは、（二オ）目も見え

ぬおにかはらのかほ、あらうみのいかれるうをのかたちをなして、しきりにとふも、いらへむつかしくて、今までおほえたるを、身のとかにて、おもてをかきにのたくひをかきつけ侍りける。

八月廿七日に都を出て暮つかたよとにて、

さしてゆく淀の川舟けふよりや
しらぬわたりのはしめなるらん（二ウ）

よるひるのかきりもしらすゆくものは
かくこそあらめよとの川ふね

あくる日は雨ふりて、夕つかたそらはれけれは、八幡にまいりけるに、西行法師かしこまるしてに、なみたそかゝりけるといひし事なと、おもひ出られて、なみたおつともおほえねとも、袖もうるをふはかりにて

祈こしさかゆく峯はよそに見て（三オ）
今は世にあふみちあふくかな

須磨よりをくりし都人のかへるさに、

たひをのみなれもやすまのうら千鳥
かへるなみにはひとりなくらむ

地あらしのふくを見て、

すまのうらやもしほの煙ふくかせを
をひてしならてかたほにそゆく

日くれかゝるに、（三ウ）

秋の色にあかしのせとの夕日かけ
やまとしまねのなみもそめけり（注2）

おもかけのひかふるかたにかへり見る都の山は月ほそくしてと、

定家卿の読し事なと身のうへのやうに覚て、

暮かゝるあはちの嶋の雲間より
こゝろほそしや三日月のかけ

ゆく船のあともはるかに淡と見る（四オ）

あは路のしまそ波にきえぬる
からこと、ひゝきのなたとをるに、

からことの浦よりかよふ秋かせに
まつのひゝきのなたもかくれす

むしあけのせとにて、

われからとおもはすとても世の中の
うきにそすまむむしあけのせと

おほしまにて、（四ウ）

はや船のかち音たかきつれ潮に
うたふも聲のおほしまのせと

とものうらにて、水鳥ともの舟近くあそふを見て、

このうらの船をともにて水とりは
なるれとなれぬわれそおとろく

たゝのうみといふところにて沖にかもめのあそふを見て、世のきうてんをまぬかれす、（五オ）　夢に白鷗となりたるとひとりことに、

波かくる世をはうらみしあらいそに
あそふかもめのこゝろなりせは

いつくしまのはしらに、

たちかへりみるめかつかぬうらなりと

はかなき鳥のあとはとゝまれ

三里ほどゆきて、をちひより(注3)し成たるといふをきゝて、（五ウ）

あとに見るあしたの山のうすかすみ
ゆふへのそらの雨とこそなれ

かくて此やまきはにたひねせんよりはとて、またこきもとして、厳嶋にかゝりぬ。とまりはらめきておつる雨は、あらしのはこふなりけり。今暫かくもあらは、浪にひかれていつちへかいになむ、かさねいかりをいれよ海の中の龍神に願たてよなと（六オ）いふをきゝて、とすれはかゝり、かくすれはいつかたにても、身をははなれぬうき世かなとて、

さきのよのむくひとせめておもはすは
うきをなくさむかたやなからん

夜に入て雨風やみけれは、名残の波に船こゝちにて、かちを枕によりふしけれとも、このうらひとさへ、たひねなやます松かせ（六ウ）よりはうらめしからむとおもふにも、更行はをのつから夢うつゝかと、おほつかなきこゝちして、

うきねするみしかき夢はしきたへの
枕のゆめのうつゝとそなる

明かた鹿(注4)のなくをきゝて

波枕ならへぬまてもなれもこの
あきはうきねのさをしかの聲（七オ）

またの日も、海のおもてふすまをはりたるやうにて、いたつらに船にあらむよりはとて、嶋めくりなとしけるに紅葉を見て、

うすくこくそめかけけりなむらしくれ
はゝそもはしもましる紅葉々(注5)

此うらのあまか、いそものとももたけ、をのれ〳〵か身のうれへをさへつりけるを聞て、日くれあけかたより風よくなりて、おはたけの（七ウ）せとゝをるに、塩はなからはかりむかふなれとも、嵐かしこし、船子ともちからをいれよ、まき入るところへは、とまもわらふたもなけよ、はしりかゝるしほに、かちひかすなと武后の水よく舟をかへすと、ひとりこちて、

塩あひのはやをの縄をたのみにて
わたるはかりのうきよなるらむ

くれかゝるほとに、遠山のいくえもあるをみて、（八オ）

すみかきは筆も及はし霧のよりに（うち歟）
かさねあけたる遠のやまかな

十一日に上のせきより、ゆわうとを渡に、八十嶋かけてことつてん、つり舟もこひしく、まん〳〵たる青海に、いかたうかふるけふは、えんあうのましはりをなせし友もなく、ゆく国はきりこめ、山もみえぬに、あとのしらなみも、風かはるかとうらめしく、さかのほる（八ウ）しほには、黄なるいつみもこれならむと、おもふまてもまれなから、姫嶋といふ所にやうやくかゝりぬ。

風もあらはいつれのしまへもよせんといふに月を見て、

風をのみまつの木の間の月よりも
こゝろつくしのたひの船路は

そやすくるほとに、豊後の国高田といふところにつきぬ。

舟よりあかりて心おちる（九オ）けれと、ねよとのかねをもまたてねさめてきけは、なかき夜のうらみをそふる衣うつこゑに、われ

もやかてなみたもよほされて、
あさ衣まきこめてうつおもひをも
よそにしらるゝつちの音かな
十二日には雨そゝき秋のしくれめきて、いとゝ袖もほしあへぬに、宇佐宮にまいり、はらひなとたてまつりしついてに、（九ウ）
詠三首和歌
初秋露
椎しはの色はわかれすをくとみし
つゆはかりちるあきのはつかせ
古寺鐘
山ふかみきりふるてらは夕くれに
をくれてひゝく入あひのかね
社頭祝（十オ）
にしのうみあとたれしより神かきの
またちよかゝれ浪のしらゆふ
なをゆきて、らかむのてらを見むとて、さかしき山ちなれは、馬をはふもとの里にをき、からよりしてゆきけれとも、またこむこともかたかるへし、よく見てきませと宮古人もいひしとおもひて
ゆきなやみ今一さかもかたるへき（十ウ）
ひとのためまて見る山ちかな
東紀伊といふ所にとまりしかのなくを聞て、
うつろふるすゑのも本の色なくて
わか身ひとつとしかやなくらん
九月十三日、日田といふ所にけふつきなんとて、夜ふかきに出て、
たか野にふみまよひて
かやか野をたれわけ初てすみ所（十一オ）
もとむる今のみちまかふらむ
たきのおつるを見て
なからへはにこりにしまぬことはりを
しらてやおつるたきのいと筋
日田にて
たちならふその名もしらぬときは木に
きりさへふかき山のうちかな（注7）
九月廿四日、宰府へまいりて（十一ウ）
詠三首和歌
川紅葉
あわてゆく水はもみちに染河の
くれなゐふかき色そなかるゝ
古寺月
のきくちて雲のたほその外ならて
月にくまなきふるてらの内
社頭祝（十二オ）
いのるそよわれも旅ねのひと夜まつ
ひとよに千代のめくみあれとは
夜もすから、ふきまよふ嵐をきくにも、そてのしくれともよほしかちに、ともすれはあらそひおつる木のはの音も、なみたのたきとひとつものゝやうに、いとはやりにさしいてたるあり、明の月さへあはれそふこゝちして、むすふのうらもいとちかしなと聞て、（十

二ウ）

さ夜かせのかへす衣は夢たにも

むすふのうらの名をは頼ます

高良玉たれの宮をふし拝て、

身の秋の露の玉たれかゝらすは

かゝるやしろをつてにきかまし

かくて日かすふれとも、みちゆく人さへなけれは、ふるるさとのことをもきかす、そこはかとなくものあはれなる夕くれに、むしの（十三オ）なくをきゝて、

秋風に尾花か本をおもひくさ

ありとしられて虫そなくなる

おなし所にてしくれの跡に月かけの露にうつるを見て、

月かけのしくれの跡にをきてけり

よるのひかりの玉さゝのつゆ

いとゝねさめかちなるに、ねやのひまいとうれ（十三ウ）しく、はゝの声をといひし小野ゝふることまておもひ出られて、あかつきかたに、

ゆくゑのみおもふねさめは明かたの

くもてにわたす夢のうき橋

十月十日　このかみのあとゝふ日にあたりて、大とこなと供養しけるに、寿量品をとふらいけれは、

ちかしともめにやはおよふしら雲の（十四オ）

かゝるみやまのうへかうへをは

懐旧

かみつ枝さそひしころの山かせに

下葉しくれてふる涙かな

ところのもの哥よみて、よしあしをさためよといひしそのおくに、

なみまをはいかてかわけんしらぬひの

つくしのうみのやへのしほあひ（十四ウ）

日かすふれはほと〳〵につきてなくさむこともあれは、

山里になるれはなるゝよそにして

こゝろとむへきしはのいほかは

十一月十五日、あかまのせきへいたりて、阿弥陀寺といふ寺に安徳天皇の御姿丼にたんさくあまた詠し給ふを見て、

いにしへのあはれとゝめしもしほ草（十五オ）

なみたかきやるもちのせき守

かくて雲のけしきあしく、あかつきのそらをみれはなといふに、雪あられ風につれてすさましけれは、にしの空をなかめて、

うなはらや雪けの雲をふきかけて

嵐にくもる月のいりしほ

十七日の夜　すのこたつものにあしさけて、むかひのかたをなかむるに、柳か浦の山雪の（十五ウ）、時雨にみえみ、みえすみ、きをひゆくあらしのさそひて、月にかゝる雲のあしはやく、月と雪とのしらみあひたる朧の月も、心あらむ人は見とこそもあるへきに、友もなけれは、万事皆夢のことし、時〳〵ひそうをあふくと独ことに、

いにしへのうつゝは夢の心地して

「忠総院豊後往来紀行」解題と翻刻

今見るゆめはうつゝともなし（十六オ）

明かたちかき西の空に月の入へき山もなし、元暦のいにしへ　平家の人々あるいは波にたゝよひ、おもひのかす〳〵をいま見る月のかけになみまにうかふこゝちして、

月かけもしめつるかたのにしのうみ

千入のそこのあはれしらせて

十九日少なきたり、よこ風なれとも、かのうらに日かす経んよりはとてやうやく（十六ウ）出して帆はしらはかりにて、すゑなたといふ所なととをるに、とも舟のかちの雫のおつるも見えわかす、船のうへこすなみに、なみたをそへ、身もうきはかりにてくれすくるに、

うきなたのかすはいたりつわかかたの

風いろのさはなをるせもかな

にしのみやのおきにかゝりて、

あしかきにかこふとすれと枕より（十七オ）

あとよりかせのひまもとむ也

十二月朔日　伏見につきて雨ふりけれとも、いにしへみやつかへ奉りし恋しさ袖もほしあへぬに、こゝかしこなかめありきけるに、むかしすみける所はのらとなりて、むかし見し庭の小松に、としふりてあらしの音を梢にそきくと、ふることまておもひ出られて、

あれにけりふしみの里のまつ風に（十七ウ）

むかしの夢はみるかたそなき

二日には雨ふりつれ〳〵とくらしぬ。都には東のゑひすをたいらくるの、君の御むすめの御はらに先の月の中のすへに、女宮生れさせ給ふと聞て、三日のあけかた京にいたりて、したしきともをたつねて、今の世にかしらをさし出し給ふ人〳〵にかくといひいれむも、人のかすかましく、たゝとをらん（十八オ）も空おそろし。庵たかへすも、ひかしよりてらし初る月日のかげにあらすや、しかるへきかたに、たちきゝ給へなといひしたためて、みやこをたちぬ。ひの岡にて日をくらし、夜もすからあふ坂をこゆるにみそれふりて、はた寒けれは火たきかれいひなむともとめて、はや鳥なけは、

よるとてもとさゝぬ御代はいたつらに（十八ウ）

鳥はそらねのあふさかのせき

夜なか過て草津につきて、すこしぬるとはなきに、あけかたより雪は直に、たちやすらはんするひとは、そのまゝうつむはかりにふりしきる。駒をしるへにあゆませゆくに、月日は夜ひるのさかひあきらかなるに、いつこよりいつる雪気の雲にさへ、とをる風さへそふらむとおもふより、おやのおもひの（十九オ）ほかのつみにあたりて、北あふみにあるをも、いくとせゆきかふとても、たよりにつけたるふみさへかなはて、このたひもそなたの空をみやるはかり也。唐にも此国にも、つかさくらひたかき人さへ、かゝるためしはあまたよなるらめとさしあたりて、身ひとつのやうにていとゝふるなみたに、雪よりもなをかきくれて、（十九ウ）

おもひやるもとしはつもりてたちちねの

さそや老そのもりのしらゆき

その日は、坂こゆることならて、つち山と云ところにとまりぬ。いつのうちやらむ、はやうすみける所より、あすたゝむとおもふその日雪いたふふりけれは、つとにはゝのかたより、おもひたつ人の

こゝろをとゝむれは、せきのとさしにまさる雪かなとありしこと

（二十オ）おもひ出られて

空はれて今朝そこえゆく鈴鹿山

せきのとさしの明ほのゝ空

さ夜中山をとをるとて

をちかたやしらぬもおなしひかりにて

雪にあけゆくさよのなか山

宇津の山とをるに、としひさしく故相国の御ともにて、のほりくたりしことなと（二十ウ）おもひ出られて、ゆめかとのみたとらるゝはかりにて

つかへこしむかしのみちの跡ふりて

雪にそまよふうつのやまこえ

三保にて

ふりつめは雪とそいさやしらきぬに

風をつゝめる三ほのうら松

冨士河のはたに、みちゆく人ありて（二十一オ）船こそり、しはし立やすらふに、ふゝきいとたへかたけれは

そらさへてふるかとみれはすそ野より

雪をそおろすふしの河風

十二月十五日、むさしのくに江とにつきて十六日に拜賀したてまつる

むさし野やかすみにつゝくつくは山

ひろきめくみの春やきぬらむ（二十一ウ）

（注1）本文「それよりわふ」→足利本「それより舟にてわふ」

（注2）「まね」→「ふね」

（注3）「し」→「に」

（注4）「なく」→「音」

（注5）足利本は歌のあとに「此歌内府御褒美のよし」とある。

（注6）「く」→「ら」

（注7）「うち」→「おく」

（注8）「はやりに」→「はなやかに」

（注9）「ねやのひまいとうれしく」→「閨のひまさへつれなくからうして鳥のなくもいとうれしく」

（注10）「丼にたんさく」→「丼平家の一門をうつしゑにして其寺にたんさく」

（注11）「めつ」→「つめ」

（注12）「やうやく出して帆はしら」→「十九日出てやう〳〵ほはしら」

（注13）「すくるに」→「すぎに」

（注14）「いろ」→「みや」

（注15）「伏見に」→「やう〳〵伏見に」

（注16）「と」→「に」

（注17）「かしらを」→「かしらをも」

（注18）「たちやすらはん」→「たよりやすらはん」

本稿を成すにあたり、亀山市本久寺、加藤文郎氏並びに翻刻の許可を与えて下さった九州大学付属図書館に、厚く御礼申し上げま

す。猶、本稿の一部を昭和五十九年度西日本国語国文学会で発表致しました。発表の際に御教示を受けた事を感謝致します。